

令和五年度
入学試験問題
国語

受験上の注意

- 一、監督の指示があるまで問題用紙を開かないこと。
- 二、解答はすべて解答欄に記入すること。
- 三、時間は四十五分です。

横浜学園高等学校

できる限り大勢の人に美術館への関心をもってもらい、かつ足を運んでもらうために、多くの美術館が現在試行錯誤をしています。二〇一二年の夏に横須賀美術館で若い人たちに人気のあるロックグループの展覧会が開催されました。会場には、そのグループの衣装や楽器などが飾られたそうです。

※ポピュラリティーのある人の展覧会をすることによって、それまで美術館に関心のなかった人たちにも関心を持つてもらえるというメリットはありません。反面、興味を持ってもらうためなら、また人目をひくなら何をやってもいいかといえば判断は難しくなります。

美術館というところは光や温湿度の管理を二四時間厳しく行い、常に一定に保たせるようにしています。(C)企画・展示だけでなくメンテナンスにもかなりの金額を投じています。それは美術品が、温湿度や光の影響を受けやすいからです。そう考えると、美術館では温湿度や光の影響を受けてはいけないような美術品の展覧会をするのが望ましいといえるのではないのでしょうか。

展覧会をするからにはとにかく一人でも多くの人に見てもらいたいと誰もが考えます。私たち美術館人はみな同じだといえます。

しかも美術館は、一般に公開するということ以外に、作品を後世に残すという重要な役割も担っています。そのために作品を収集したり保管したりしています。「今」だけを考えていては、その役割をまっとうすることはできません。将来の文化を担うみなさんたちには、ぜひこのことを深く心に留めておいてほしいと思います。

(草薙奈津子『美術館へ行こう』より)

【語注】

※侍女……………身分の高い人に仕え、身の回りの世話をする女性。

※インスタレーション……………展示空間を含めて全体を作品として見ている観客が、その場において体験できる芸術作品。

※濾過……………液体や気体を細かい穴がたくさん開いた物質に通して、ごみなどを取り除くこと。この場合は、ある観点や立場から物事の必要なものを残して、条件や基準に合わないものを取り除くこと。

※普遍……………全体に広く行き渡ること。例外なくすべてのものにあてはまること。

※ポピュラリティー……………大衆性。流行。評判。人気。

問一 ――部⑦⑧⑨について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- | | | | | |
|---------|--------|---------|--------|-----------|
| ⑦ サカ(ん) | ⑩ カイセツ | ⑮ 都合 | ⑳ ケイケン | ㉑ 傾向 |
| ㉒ 映像 | ㉓ 技法 | ㉔ 試(され) | ㉕ ザツタ | ㉖ センニユウカン |

問二 本文中の空欄（A）（B）（C）にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | |
|------|------|-------|-------|
| ア 一方 | イ さて | ウ つまり | エ さらに |
|------|------|-------|-------|

問三 ――部①「これ」が指す内容を「」であること」につながるように本文中より三十字以内で抜き出して答えなさい。

問四 ――部②「絵巻の最初のほうは横皺の跡がいっぱいあるのに、後ろのほうはほとんど無い」理由を「」から」につながるように本文中より四十字で抜き出して答えなさい。

問五 ――部③「その」が指す内容を本文中より二十五字以上、三十字以内で抜き出して答えなさい。

問六 ――部④「そういうこと」とは、どのようなことか。「」こと」につながるように本文中より三十字以内で抜き出して答えなさい。

問七 ――部⑤「この二つ」とあるが、「この」が指す内容を本文中より二十字以内で抜き出して答えなさい。

問八 本文の内容と合っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 絵巻はもともと、すべてを広げて鑑賞するものであった。
- イ 絵巻は後ろへいけばいくほど、皺の跡が多く残っている。
- ウ 美術は時代とともに変わっていくものであるため、昔ながらの伝統や技法は必要ない。
- エ 美術の世界は自由であるため、自分の考えや感じたことをどんどん主張すべきだ。

問題二 次の文章Ⅱを読み、後の問いに答えなさい。

文章Ⅱ

芭蕉はそのデシたちに、彼の詩風を支えている二つの原理は流行と不易であると語っている。これは、日本の詩を常に脅やかしていた二つの危険が何であるかを考えるならば一層よく解ることである。その一つは、そしてこの方が大きかったのであるが、既にある傑作を研究し、模倣し過ぎることから生じる陳腐と不毛だった。芭蕉は彼の詩風が年とともに変わり、月ごとに新しくならなければならぬと主張した。また彼は、古人の後から付いて行くことを望まず、彼らが求めたことを自分も求めているのだとも言っている。ということは、昔の詩人たちが人間に永遠に課されている各種の問題に与えた解答を受け入れず、それを自分で解決しようとしたということである。彼が挙げている第二の原理である不易ということはこのことを指している。十七世紀の日本の文学に起った新しい運動の影響で、伝統的なものがイッサイ斥けられ、日本の詩人たちが自由に酔った時、その結果はコンランに終る場合が多かった。しかし芭蕉にとっては、流行と不易の両方が彼の俳句になくはならなくて、彼の最も優れた作品ではこの二つが、ここで述べた意味でだけでなしに、幾何学的に言えば、瞬間的なものと恒久的なものとの交わる点となって表現されているのが見られる。その一例が、芭蕉の俳句の中では或は最も有名なも知れない。

古池や蛙とびこむ水の音

である。

その第一節で、芭蕉はこの詩でその不易の要素をなしている時間を超越して動かない池の水を出している。次の一節の蛙が瞬間的なもので、この二つが水の音という一点で交わっている。もっと方式通りに解釈すれば、この詩で不易のブンは無数の日本の詩でその主題をなしている真理のニンシキであり、芭蕉の寄与は、それまでに何度も詩で用いられて来た蛙の鳴き声でなしに、その跳躍を詩に使ったことであつた。

(ドナルド・キーン著、吉田健一訳『日本の文学』より)

【語注】

※陳腐……………古くさいこと。ありふれていて、つまらないこと。

※不毛……………何の進歩も成果も得られないこと。

※幾何学的……………形などが法則にのっとっていて、一定のパターンを持っているさま。

※恒久……………長く変わらないさま。

※寄与……………社会や人のために役に立つこと。

問一 — 部⑦(ウ)について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- ⑦ デシ ① 一層 ④ 既に() ⑤ 主張 ⑧ 影響
② イッサイ ③ コンラン ⑥ 瞬間 ⑦ ブブン ⑨ ニンシキ

問二 — 部①「彼の詩風を支えている二つの原理」とは何か。本文中より五字で抜き出して答えなさい。

問三 — 部②「その」が指す内容を本文中より二十字以内で抜き出して答えなさい。

問四 — 部③「彼ら」が指す内容を本文中より一語で抜き出して答えなさい。

問五 — 部④「それ」が指す内容を本文中より三十字で抜き出して答えなさい。

問六 — 部⑤「芭蕉の俳句」とあるが、次の中から「芭蕉の俳句」を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雀の子そこのけそこのけ御馬が通る
イ 閑さや岩にしみ入る蟬の声
ウ 柿くへば鐘がなるなり法隆寺
エ 菜の花や月は東に日は西に

問七 — 部⑥「この二つ」とは何か。本文中よりそれぞれ三字と一字で抜き出して答えなさい。

問八 芭蕉の句「古池や蛙飛び込む水の音」の季語を抜き出して答えなさい。また、その季節を漢字で答えなさい。

本文の内容と合っているものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 芭蕉の詩風には流行と不易がなくてはならないと芭蕉は主張した。
- イ 芭蕉は新しい詩風を嫌い、古人の後から付いて行くことを望んだ。
- ウ 芭蕉は既にある傑作を研究し、模倣することが重要だと考えた。
- エ 十七世紀に起こった新しい文学運動によって、伝統的なものの価値が見直された。

問題三

文章Ⅰでは、「芸術の多様化」と「不易流行」の視点について述べている。文章Ⅱでは、日本の詩、特に芭蕉の詩風「流行」と「不易」について述べている。二つの文章を読んで、次の問いに答えなさい。

- (1) 次の文章は、文章Ⅱの「流行」「不易」についての解釈をもとに、文章Ⅰの、美術鑑賞における大切な視点や芸術の多様化について論じたものである。文章Ⅰ・Ⅱの内容と合うように、空欄にあてはまる語句を後の語群からそれぞれ選び、答えなさい。※語句は一度しか使用できないこととする。

芭蕉は、「(1) (1)」という言葉で、自らの表現方法を表した。「(2) (2)」とは、「いつまでも変わらないこと。不変」という意味を超えて、「時代を超えても変わることのない本質」とされる。そのような伝統的な美という意味にとどまらず、文章Ⅱでは、(3) (3) が古人(昔の詩人)と同じように「人間に永遠に課されている」様々な問題を「自分で解決しようとした」姿勢や考え方も説明している。また、文章Ⅱでは、芭蕉は「日本の詩を常に脅やかしていた二つの危険」でより大きかったものは、「模倣し過ぎることから生じる陳腐と不毛」だと考え、「新しくならなければならない」と主張したと述べられている。つまり、「(4) (4)」の視点を持つことが大事であり、この「新しくならなければならない」という考え方によって、世の中や時代と共に、「自らが新しい(5) (5)」を取り入れること」をした。芭蕉にとっては、この「流行」と「不易」の両方が、自身の(6) (6) になくなくてはならないものであったと考えられている。

文章Ⅰでは、「不易流行」の視点は(7) (7) においても同様に大切だと述べている。過去の作品は、時代の濾過器を通っても残された、「(8) (8)」のものの持つ素晴らしさがある」と述べている。一方で、普遍的な美などへの「(9) (9)」とともに、「今日的なものに対する好奇心」を持ち合わせてこそ、「美術を楽しめる」と述べている。つまり、「不易」の視点と「流行」の視点である。したがって、文章Ⅰの筆者は芸術の多様化や、美術を鑑賞する者の感性の自由について、非常に(10) (10) であるといえる。

【語群】

写生 ・ 不易流行 ・ 擬人法 ・ 不明 ・ 流行 ・ 最新 ・ 不易 ・ 真実 ・ 疑い ・ 子規 ・ 蕪村 ・ 芭蕉
 停滞 ・ 変化 ・ 進化 ・ 短歌 ・ 俳句 ・ 絵巻 ・ 美術 ・ 武術 ・ 模倣 ・ 激変 ・ 不変
 幅広い視野 ・ 狭い視野 ・ 革新的な視野 ・ 悲観的 ・ 楽観的 ・ 否定的 ・ 好意的

(2) 文章Ⅰの後半では、「ポピュラリティーのある人の展覧会」について述べられている。芸術や文学が、ポピュラリティー（大衆性。流行）を追うことの利点（メリット）と欠点（デメリット）について、文章Ⅰの「芸術の多様化」や文章Ⅱの「不易流行」についての内容をふまえて論じた文章として、正しいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「芸術の多様化」は、それまで美術館に関心のなかった人たちにも、足を運んでもらうというメリットを生み出した。一方で、昔の芸術家以上に模倣を繰り返すという結果も招いた。それは間違いなくデメリットである。

イ 「古池や」の芭蕉の俳句が示すように、伝統的な「蛙の鳴き声」ではなく、「蛙の跳躍」を詩に使うことは新しく、人の関心を集める。美術館におけるポピュラリティーの追求でも似た狙いがあり、同じような利点を生む可能性が大きい。

ウ ポピュラリティーを追求することの利点と欠点をふまえると、普遍的、伝統的な美などへの幅広い視野と、今日的なものに対する好奇心とといった二つを持ち合わせることが大切だ。そうすることで、美術や文学をより深く感じることができるだろう。

エ 興味を持ってもらうためなら、また人目をひくためなら、何をやってもよいのかという批判はもつともである。過去の作品の中で、時代を超えてもなお残ってきたものがある。そのような「不変のものを持つ素晴らしさ」や伝統を重んじるべきだ。

オ 俳人芭蕉の唱えた「不易流行」は美術の世界にも言えることである。「芸術の多様化」を受け入れることが、ポピュラリティーを追うことの欠点を解決する近道である。そうすることで、利点と欠点のバランスが取れるのである。

以下、余白